実践レポート

「３年後の理想の生徒像をめざした計画的な学年経営について～個を伸ばすための集団を醸成するために～」

三豊市観音寺市学校組合立三豊中学校
教諭　琢磨　啓和

１　はじめに

めまぐるしく変わる社会情勢の中、今の学校教育がなすべき役割がぶれてはならず、義務教育は子どもたちが将来、民主的な国家を担う社会人に育っていくための素地を作っていかなければならない。近年、特に現場の私たちが感じている基礎学力と集団生活のモラルの低下については、学校教育としての役割を明確にして取り組む必要があると考える。入学時より３年後の義務教育修了に向けてめざすべき生徒の像を意識し、見通しを持って段階的な指導を計画的に行う必要があると考え、現在実践している途上である。

２　実践の内容・方法

３年間を通して、１年時は「聞く姿勢の確立」、２年時は「伝える力の向上」、３年時は「考えて行動できる力の育成」と自立へ向けて段階を経て成長していくことをめざして日々実践を重ねている。

(1)　１年時での実践

学年団目標は「授業第一」である。中学校生活のすべての基本は授業にあるのだという意味を込めた目標である。１年時の１学期は中学校生活の９分の１ではあるが、この時期の指導が３年間の行方を決めると言っても過言ではなく、中学校生活のルールに対する認識をここでしっかり押さえておかなくてはならない。大切な事は職員の共通意識・共通行動である。これまでの反省を生かし、職員間でしっかり話し合いを行い、以下のことを徹底して指導することにした。

整列する（列が直線）・靴をそろえる・人の話を見て聞く・人の権利を奪わない（私語・授業妨害）・静かに待つ、静かに聞ける状態になる・丁寧に字を書く、自分の名前を丁寧に書く、以上のとても基本的な事ではあるが見過ごしたままになってしまわないよう、１年間を通して重点的に指導しながら、反復指導を続けた。

① 朝の読書の継続

朝の始まりを落ち着いた雰囲気でスタートするために、毎日の朝の時間の 30 分間は読書にあてた。静かな中で集中する力を養い、学級担任も副担任も他事はせず読書に集中し、静かな時間を共有する雰囲気作りを心がけた。これは２年間続けたが、読解力や集中力、創造力の向上とともに生涯学習という観点からも効果があると考えている。３年生になっても少しの空いた時間に本を読む生徒も多い。

② 「読み・書き・そろばん・クラスマッチ」の取組

基礎や基本の徹底を図るために、教科と連携しながら学年で取り組めることを考え「読み・書き・そろばん・クラスマッチ」と銘打ち、学級対抗で行う形で実践した。これは新入生テストの結果から、それほど低位層の生徒が多くはなく、努力次第で、どの学級にも勝てるチャンスがあると考えられたからであ

る。各学級でも事前にしっかり学習をした。実施したのは以下の４つのテストである。

〇アルファベット対決　　〇基礎計算力対決
〇校歌書き取り対決　　〇都道府県書き取り対決

「アルファベット対決」
開催！

「読み書きそろばんクラスマッチ」の第１弾。
アルファベットの書き取りテストで勝負だ！
各学級が平均点で競い合い、同点の場合は満点者の数で勝負を決する。
全員が100点をめざし、学級として幸先のいいスタートを切ろう！！　決戦は５月１日（金）

第1弾「アルファベット対決」は2組の勝利！

	1組	2組	3組	4組
平均点	５４．９	５５．６	５３．５	５５．５
満点者数	１９人	２２人	１１人	２０人

次回は基礎計算力で勝負！

予告や結果は掲示して生徒達の関心・意欲を高めた。

「字を丁寧に書かせる」という指導目標とも重ね、校歌や都道府県の書き取りでは、朝の時間に視写活動を取り入れてテストを行った。また国語科の協力を得て、最初の漢字練習帳の提出時にはらいやトメ等に留意し、徹底して字を丁寧に書くということを指導してもらった。また、それと並行して硬筆検定を希望者に受験させたが、５級からスタートし、現在も一級合格者以外はほぼ全員が受験をしている。また、９教科のテストがある学期末テストでは、学習の一助としてクラスマッチ形式で技能教科のクイズ大会を行った。教科担当の先生方に難易度の違った問題を作成してもらい、学級ごとに４人一組のグループが順次問題に答えていくという学級対抗の形式をとった。生徒には大好評で２年時まで続けた。

③ サミット活動による啓発活動

外からの刺激だけでなく、生徒の内からの活性化を図る必要があり、学級委員長で組織する学年団サミットで呼びかけを行い、学級で競い合って伸びていこうとする雰囲気を作り、意識を高めた。準備物の調査、授業態度の評価や自主勉強ノートの量などを、サミットが呼びかけ、結果を数値やグラフで目に見える形で掲示した。また調査項目によっては個人的に優れた生徒を表彰するなど、月に１回の定期的な会で、適切に時期を考慮した目標や実践項目を考え実施した。

④　職員集団として

１年の１学期の評価は生徒や保護者が最初に見る評価であり、後々にもつながるため、生活態度等の評価については学年で協議し、その絶対的な基準を学年団の職員全員で決めた。最初の懇談でしっかり説明をし、評価する側がぶれないことで３年間客観的な評価ができ、以降の通知票に対する保護者の疑念を少なくすることができる。また、時間がとれる時は毎朝短時間、学年職員でミーティングを行い、生徒の様子についての情報交換や指導すべきことの意思統一を図る。時期を逃さず歩調を合わせて指導ができるのでずっと続けている。

(2)　２年時での指導

２年時を「社会人になるための素地を作る最初の１年目」と位置づけ、３年生へのステップとしてこの時期に学んでほしいこと、育てたいものを明確にして以下のような実践をした。

学年団目標は「自立～伝えられる人に～」である。

① 「スピーチ～思いを伝える～」の実践

授業だけでなく、自分の考えを多くの人に伝える場を作ろうと、週に１回学年集会を行った。「書いているものを読む→覚えて話す→分かりやすく伝える」というようにレベルアップするようにした。テーマはその時に関心があることや、道徳の授業での価値観と関連させたものにし、希望した順に発表した。この場でのスピーチが道徳の授業の中に活きることもあった。スピーチ終了後は聞く側全員が発表者それぞれにコメントを書き、コメントを集めたシートをプレゼントした。この活動も生徒の表現力を高める一助となっており、聞く側のコメントにも成長の跡が感じられた。また、こういったことをするためには聞く側の姿勢や雰囲気がとても大切になることが分かり、「聞く姿勢の確立」はこういう場合にも大切であることを再認識させられた。また普段あまり発表をしない生徒にとっては大勢の人前で話したということ自体が自信につながるいい経験になったようだ。

各学級から１枚ずつコメント集が

② 総合単元化で取り組んだ職場体験学習

２年生の最大の学年行事は職場体験学習である。社会人としてのマナーや働くことの意義、さらには自己適性や自分の生き方を考える絶好の機会となる。これをできるだけ意義深いものとするために以下のように、多方面からアプローチしながら統合的に考えて実地体験にのぞんだ。

集団討論は１年時より定期的に行ってきた

自己分析・自己適性を知る
→職業についての学習→先生方の体験談→スピーチ「職業について」
→道徳「勤労の意義」→集団討論「職業の３要素」→講演会「私の進路」
→マナー講座→事前・直前指導→実地体験

体験後には事業所ごとにまとめをし、それを発表した。それぞれのグループに発表の方法は任せたが、自分たちで考えることで表現力の高まりにつなげた。

また評価については各事業所からの評価を個々の生徒に返したり、通信に載せたりすることで、自信や有用感を感じることにつながった。

③ 生徒に任せた活動

毎月の目標を考え、工夫して全体に発表する学年サミット活動や体育委員によるクラスマッチの運営をはじめ、サミット活動や委員会活動などの発表はできるだけ生徒に任せてきた。各行事等における生徒のあいさつなども内容はノーチェックで任せたものも多い。その結果、多くの生徒が発表したり表現したりすることに抵抗が減ってきているように思われる。

(3) ３年時での実践

学年目標を「自立～考え、行動する～」とし、３年時ではさらに人の意見に耳を傾け、考えたことを自ら発信できるような力を育てたいと考えた。義務教育最終学年でさらに民主的な社会人の素地づくりを行い、将来社会に出た時に必要となる知識について考えを深めさせたいと考えた。

① 平和学習の実践

長崎への修学旅行で行っていた現地学習がなくなり、社会科や道徳とも関連づけながら沖縄戦と原爆を中心に学習した。夏休みには「戦争は最大の人権侵害であるとはどういうことだと考えるか」というテーマで、自分の思いを戦争に関連する書物や資料館等に行って感じた感想と絡めて書くようにし、様々な意見を紹介することで一層考えを深められるようにした。

② 人権教育の実践

現代社会に残る課題や今問題になっていることについての知識を学ぶ場をできるだけ多く設け、社会の事象により興味・関心を持って欲しいと考えた。

③ メジアン３番勝負

学級対抗的要素を残しながら個々が学習面において努力するための啓発活動として、生徒からの提案により２学期スタートの３回分のテストで学級対抗で各教科の中央値を競争した。

3 実践の成果

日々の現場指導こそが最重要で、しかも全職員で共通行動がとれることが大切なのだろうと思う。学年全体のムードとして人の話をよく聞き、受け入れようとする雰囲気ができており、２年時の 11 月に実施された学習状況調査の結果からも良好な状況がうかがわれる。

◇ 学校・家庭生活に関する調査で県の平均を 10%以上上回った項目

・学級みんなで協力して何かを成し遂げ、うれしかったことがありますか。

・学級では安心して自分の意見を言うことができますか。

◇ 学習への取り組み方に関する調査で県の平均を 10%以上上回った項目

・家で学校の宿題をしていますか。

・分からない問題があるとき、見方や考え方を変えながらあきらめずに取り組んでいますか。

授業中の相談の時間等にも無駄話が少なく、相談や教え合いの時間が安心してとれる。休憩時間などの生徒同士の会話に学習が話題になることも多く、さわやかな会話をしている。ノートの取り方や聴く態度などはほぼ全員が確立しており、基本的な授業態度については１年時からの指導の積み上げの成果であると考えている。

4 課題及び今後の取組の方向

学習状況調査の中で唯一平均を下回った項目が「新聞やニュースなどに関心がありますか。」であった。学習や部活動に熱心に取り組む姿の反面、社会への関心が低いことは極めて残念であったが、翌年４月の全国学力・学習状況調査の結果では良好な結果が出ていた。これから特に卒業するまでの間に人権や社会人となっていく上で知っておきたい知識を伝え、社会の動きやできごとに関心を持ち、考えられるような社会性を育てていきたい。私たちの学年は３年間を通じて持ち上がった職員が多く、これまでの流れを共有し、意思疎通がしっかりできた。さらに新しく加わった職員が新しい息吹を吹き込み、学年団の職員集団が一枚岩であったことが生徒を指導する上でよかったと自負している。入学してから卒業するまでに生徒がどう育ってほしいのか、学年を追って集団としてどのように醸成していくのかというイメージを共有することはとても大切なことだと感じている。